

I 「それはそれとして、あなたがたもそれぞれ、自分の妻を自分と同じように愛しなさい。妻もまた、自分の夫を（かしら＝家庭の責任者として。最終の決断をし、責任を取る）敬いなさい」：33。ここには、「互いに愛し合いなさい」という事は根底にあるが、あえて男性と女性の違いが記されている。女性である妻は、男性である夫に愛される（良く話を聴いてくれて、気持ち、感情を受け留めてくれる）事を求め、男性である夫は、女性である妻から敬われる（やったことを評価される、褒められ尊敬される）事を求める。神は男性と女性を違う性質の存在として、相補い合う者として造られた。

II 「神は人をわれわれのかたち（御性質のかたちに似せて）として創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された」創世記1：27。

1. 人を造られた三位一体の神は、男性でも女性でもないが、男性らしさと女性らしさの完全にバランスの取れた御性質、恵みとまことに満ちた神である。神は、男性と女性を競争する者としてではなく、性質の違う存在として、相い補い合う者として造られた。神が造られた人間が、男と女の両性において存在する事は、互いに捕足し合う関係にある事、また人格的に平等な存在であることが示されている。

2. 神である主は言われた。「人がひとりであるのは良くない（これは、結婚だけの事ではなく、人は、神と交わり、人間同士の交わりの中で成長し、支え合う事を示す。結婚も独身も神からの賜物）。わたしは人のために、ふさわしい（直訳：「彼の前にあるものとして、彼に対応するものとして」。補足だけではなく、同類。一致と類似性。）助け手（人格的に交わる存在。自分が出来ない事をしてくれる助け手。男女、お互いに助け合う）を造ろう」創世記2：18。

3. 神である主は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。神である主は、人から取ったあばら骨を一人の女に造り上げ、人のところに連れて来られた」2：21, 22。女は男の助け手でありながら、人のかたわらに立つ者として、人格を大切にされる存在として造られたことを「あばら骨」は示す。女が、男の頭の骨から取られたら、女は、男を押さえつける支配者になった事だろう。もし、女が、男の足の骨から取られたら、女は、男に踏みつけられる奴隷になったかもしれない。神は、そうならないように女性を、男性の「あばら骨」から取られた配慮のある方である。

III 「主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。女が男から出たのと同様に、男も女によって生まれるのだからです。しかし、すべては神から出ています」I コリ11：11, 12。神は、男性と女性を大切な存在として造り、補い合う存在として造られた。

IV 神が造られた男性と女性の違いを理解して神からの使命を協力して行う事が大切。教会でも社会でも。

1. 神に造られた女性は、男性より、女性同士で語り合い（「感情の共有」）をするのが好きである。神に造られた「目的型」の男性は、ある話し合いで目的や要件が達成すると、それ以上、おしゃべりは続きにくい。個人差はあるが。現在まで医学が進み明確になったことがある。神が造られた女性は、左脳の中でも言語中枢が発達していて、右脳の方では感情的機能が目立っている。男性が、帰宅する。女性である妻は、一日の色々な事を聴いてもらおうと、ご主人との会話をしようとする。しかし、男である夫は、妻の話しに関心を示すゆとりがなく、妻は、寂しく感じる。夫は、難しい人間関係の仕事を終え、家に戻り、妻から「今日も一日、お疲れさま」と迎えて欲しいと願う。女性は、話を聞いてほしい、気持ちを受け止めて欲しいと願う。そこには男性と女性の違いがある。共働きなら、ゆとりがお互いになく、なお大変であろう。神の助けが必要である。祈り合いたい。

2. 神が違う存在として造られた男女が、家庭、職場、学校、教会、社会で協力して事を成す場合、神が造られた「男と女は体、気持ちの表し方、性質から役割まで違う」という事実を受け入れると良い協力が出来る。「互いに受け入れ合いなさい」ローマ15：7。

3. 男は「事実発見型」、「目的達成型」。特別に言わなければならない大事な事でない限り、細かい事まで、取り立てて言う必要を感じていない面がある。個人差はあるが。男の子を持つお母さんの経験。「〇〇。今日どうだった？」返事「別に」。会話が續かない。個人差はあるが。女の子は違う。「あのねあのね、お母さん、今日、こんな事があったんだよ！あの人にこんなことがあったのよ」。「そう。それで」と会話が續く。女性は「体温計」の賜物。その時々「どのように感じているのか」という気持ちを大切に。その気持ちを自分の体温計で計って一緒に感じていたい。また女性の方が直観的。するどい。男性は、事実を分析し、それをまとめようとする。どちらも大切。男女の違いを認めて、補い合いたい。

4. 男性は、目標達成型。それ故に会話の目的が達成すれば、会話が續きにくい。買い物も、目標の物を買えれば、家に帰りたい。女性は同情と感情を共有したい。女性は、感情、気持ちの共有をしたいので、会話そのものを楽しむことが出来る。男性は話をまとめたがり、女性は話を聞いてもらいたい。個人差はあるが。※大切な会議で時間に限りがある時、まとめる男性の賜物は必要とされる。女性は、雰囲気を楽しめる。男女の違いが分かると、接し方が分かる。男女の違いを理解し合い、関係作りをしたい。

5. 男性は、実用主義の傾向。女性は共感的。※父の看病をした時の証し：医師と看護師の役割分担。どちらも必要。神は男女を違うように造られ、協力し合うようにされている。※実用主義の男性の弟子達は、主が十字架につけられた時、まだ、主の十字架の真の意味が分からずに、「弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げしまった」マタイ26：56。しかし、主の苦しみ共感する女性達は、イエス様を見捨てて逃げたりしなかった。主が十字架で死なれた後、「マグラダのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメは、イエスに油を塗りに行く」と思い、香料を買った」マルコ16：1。その後、御聖霊がペンテコステ（五旬節）に天から下られ、弟子達は、御聖霊に満たされ、心の目が開かれ、十字架の意味と復活の勝利が分かり、福音を伝え、主の教会を建て上げる指導者となって行く。男性も女性も造り、救われる神は、男女を、その人らしく用いられる。男性は、物事を合理的に対処する賜物が与えられている。女性は、その場を飾り、細かい配慮が出来る賜物が与えられている。男の子と女の子の遊びも小さい時から違う。神が与えられた違う賜物。

V まとめ。

1. エペソの5：22-33は、夫と妻の関係だけの御言葉ではなく、花婿であるキリストと花嫁である教会の関係を示している。キリストは、私達、教会を命を懸けて愛しておられ、私達教会の為に十字架で死に、罪を償い、愛し赦されているだけではなく、私たち教会を聖め続けておられる。今も。それは再臨の時、聖く罪の傷のない栄光の教会を花婿であるご自分の前に立たせるためである。：27。

2. 御言葉の順序、文脈＝妻と夫、子と親、すべての隣人との関係の愛、尊敬の源→①「むしろ、御霊に満たされなさい」エペソ5：18。私達には、愛はない。しかし、神に求めることが出来る。御霊は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制の実を私達に与えて下さる。②「キリストを恐れて、互いに従い合いなさい」5：21。互いの人間関係の前に「キリストを恐れて」がある。まず主が私達を命を懸けて愛し、救い、聖め続けておられる恵みを感謝し、主を恐れ敬い、主からの愛で互いに従い合いたい、仕え合いたい！③神が造られた男性と女性の違いを認め合い、互いに仕え合い、助け合い、補い合い、家庭と教会を建て上げ、社会で神からいただいた賜物を生かして行きたい。結婚も独身も神からの賜物。人と比べる必要はない。「人それぞれの生き方があります」Iコリント7：7。